株式会社モリタ対談取材　日時：令和元年7月2日（火）　場所：株式会社モリタ

株式会社モリタ × 市議会

三田市議会議長と広報委員会が三田市テクノパークに本社のある株式会社モリタに伺い、企業から見た市の課題や市議会のことなどをお聞きしました。

厚地議長：議会だより「つなぐ」では特集として、三田市内に在住、在勤されている方との対談を掲載してきました。今回は消防車の製造で国内ナンバーワンの株式会社モリタ様にお話を伺うことができることを嬉しく思います。まず始めに、会社として現在目指していることは何でしょうか。

尾形社長：弊社は1907年に創業し、今年で112年の消防車製造の老舗です。国内の消防車の約６割を生産しております。ただ、消防関連の国内需要には限りがあるため、今後は国内だけでなく、海外の需要を獲得できるかが課題です。世界では、オーストリア、アメリカの企業が消防車製造販売において1位、2位であり、弊社は3位です。今後「安全・安心を世界に提供できる会社」として、世界を舞台に更なる発展を目指しているところです。

厚地議長：テクノパークを開発した当初は、企業の本社に来ていただきたいとの思いがありましたが、現状は事業所が多いです。そのような中で三田市に本社を置いてくださって大変嬉しく思いますが、どのようなお考えからでしょうか。

尾形社長：以前は生野区で製造しておりましたが、工場の周辺に住宅が増え、移転を考え始めていた頃、テクノパークの開発を知り、三田に移ることになりました。まず始めに、はしご車の専用工場を移転しました。その後さらに土地を取得し、平成20年には全ての工場の移転を行って生産を集約し、三田に本社を置くこととしました。現在はグループ会社が他に２社三田に移転したため、活動がより活発になっています。

消防車の出荷は全て自走ですが、三田は高速道路のインターチェンジがありアクセスが良く、とても便利な立地です。車の流通には非常に良い場所だと思います。また、大阪から通っていた従業員が三田に引っ越すことが増え、現在140名程が三田市民となり、三田は住みやすいまちだと聞いております。

加藤 雅義（かとう まさよし） 生産本部長

尾形 和美（おがた かずみ） 社長

小田嶋 巌（おだしま いわお） 労務部長

「三田から、安全・安心を世界へ」

厚地議長：三田の良い立地条件を活かして、これからも本社機能を置く企業に来ていただければと思います。多くの従業員の方に三田へ越して来ていただき、住みやすいと感じていただいていることは大変嬉しく思います。議会の中でも問題として取り上げられるのですが、通勤についてはどうでしょうか。

小田嶋部長：通勤の時間帯に道路の渋滞が発生しており、三田幹線を利用したマイカーでの通勤は大変です。ニュータウンからテクノパークまでの路線バスを強化していくと、市から聞いておりますが、それだけで問題が解消するかは何とも言えない状況です。鉄道の駅を作っていただけたら従業員にとって便利になりますが、市の努力だけでは解決できない問題だと認識しています。

厚地議長：お話を伺い、やはり通勤時間帯の渋滞が課題だとわかりました。議会としてもこの問題について今後も取り上げていきたいと思います。

ところで話は変わりますが、今回は議会だより「つなぐ」の取材をお願いさせていただきました。議会だよりを作成する上で課題となるのは、市民の皆様に読んでいただける紙面作り、わかりやすい内容作りです。「つなぐ」についてどのような印象を持たれましたか。

尾形社長：議会だよりの作成は難しいと感じました。議会で行っていることを掲載するため、テーマが絞られてしまう。そこに読者の気を引くような記事も併せて作成していくのは難しいと思います。多くの方に手に取ってもらわないといけない、そのために今回の様な取材などに取り組まれているのだなと思いました。

厚地議長：最後に、企業消防団としての活動や、市内小学校の社会見学の受け入れを行っておられ、市政にもご協力をいただいておりますが、地域との連携についてはどのようにお考えでしょうか。

尾形社長：現在は「三田国際マスターズマラソン」などの事業に協賛をしておりますが、三田市に当社を含めモリタグループの会社が３社ありますので、今後、地域との関係も深めていきたいと考えております。

三田市で活躍する企業「株式会社モリタ」さんに、とても有意義なお話を伺うことができました。これからも三田から世界へ「安全・安心」をたくさん届けていただきたいと思います。　広報委員会委員長　佐々木 智文